

昔がたり (五)

あ ざ み

外國先生には遂に御歸國の期が來た。富士見軒で其送別會があつた。私達の一つ上の級の人等が、先生來校そもくの

やこの出來なかつた生徒たちの事を思ひ出して下さるであらうか。

生徒であつたので、其級をはじめ先生の教を受けた者共が多く集つた。重な人々の送別の辭があつて後、先生は立つて別れの演説をなされた。いふ人もきく人も涙であつた。先生は更にシャンパンをぬいてみんなの健康を祝して下さつた。其後二三日して先生は歸國の途におつきなさつた。新橋でお別れする時、「さらばわが子どもたち、折々は吾をも思ひ出でよ」とただ一言仰つた。先生の大きいお目は涙で光つてゐた。發車が迫つた時先生は二三の人をよんで、「時々は青山の墓をも見て呉れよ」と仰つた。私等は御きげんよろしゆうともいひ得ずいつまでもくちちつくしてゐた。ああ、あのけしきは今猶見える様に思ふ。先生も其御ふるさとで時々は日本の事

(先生は青山へ夫人を残して御歸國なさつたのだ。あのやさしい美しい夫人、時々音楽會にきれいなソプラノで独唱をなさつた夫人はとこしへに日本の地にねむつていらつしやるのだ。さういへば青山へはしばらくゆかない近い中にいつて見やうと思ふ。)

先生の御歸國前、一日鹿鳴館で、獨乙普及福音教會の慈善音樂會があつた。日本に於ける先生最終の會であつた。先生はオリンはもとよりピアノをもお弾きなさつた。此會で私は初めてクラビア、トリオを聴いた。誰の曲だつたか知らないけれどそのピアノの部を受持つたのは駿臺の聖人であつた。私は先生の指圖で舞台の横に直つて見つつ聴く事を得た。

人も世も忘れて聴き入った事を今もたしかに記憶して居る。駿臺聖人がピアノを以て公衆の前に立たれたのはこの會がはじめてであつたのだ。ああとほい、とほい昔。』

外國先生が御歸國になつてからしばらく横濱から二人の西洋婦人のお方がトニツクソルフハといふものを教へに來た。私達も傍聴に出かけた。これは五線も音符もなく、皆Dとか

Rとかいふ記號で書くのである。和絃などもやはり或方法で示して其上青や赤や黄で塗つてあるのもあつた。其當時はコルド、D—B—1、だの何だのといつてよく覺えて居たが今ドービーワンは不殘忘れた。覺えて居るのはドレミの手つき位の事である。握りこぶしはドといふしるし、レの時は指をそろへて前へ出す（拇指が上になる様にして）、ミは撫でる様な手つき、フハは指さしを下へむけ、ソルはレの時の形を高く上へあげ、ラは幽靈の様な手つき、シはゆびさしを上にもむけ、上のドは握りこぶしを高くあげる。

（一寸皆様、この手まねで「蝶々」でも何でもして御覽なさいまし）

但し此先生達はぢきにやめてしまつた。

或時在留外人等の催で慈善會が學校で開かれた。普通の音樂會の後、フハウストの一幕を出すといふので前々から大變な人氣であつた。フハウストには伊太利公使館のブラチャリニ氏、メツヒストにはオーストリー公使クーデンホフ男がなつた。オーケストラはたしか式部職のと覺えてゐる。今の學校開校以來夜の會は初めてとあつて電燈が引かれる、假舞臺が出来る、書割が運ばれる、二三週間も前から異人さんらが人足を大勢つれて來て指圖をしてゐた。私達はかげで唱ふ合唱をしきりとけいこしてゐた。其日となつて皆喜んで集つた。音樂會はかたの如くすんでいよいよフハウストとなる。幕があくと背景は髑髏をのせた書棚か何かですべてフハウスト居間の體。こげ茶色のパーツとした服をきたフハウストは机によつて毒杯を前にして片手で頭をささへて片手は力なくたれてゐる。しばらくして何とかかとか唱つて毒杯をあげやうとしつつ懊惱して室内をあるきまわつてゐる。向ひ側の幕のかげで男の人達がセレナチエーとかいつて唱ふ、そのあと此方側では女の人達が

ラバガブビルラといふ和製の伊太利語でかねて練習の合唱をしたやがてメフェストが、黒地に赤い處のある着物をきて鳥の毛かしらんついてゐる異様な帽子をかぶつて出て來た。メッフヒストは獨乙語で、フハウストは伊太利語でしきりにかけ合ひで唱つてゐる。メッフヒストが壁を打つと壁が割れて美しいグレートヘンの糸線姿が現れた（グレートヘンには横浜の何とかいふお嬢さんがなつたので。）美しい美しい有様である。猶色々のしぐさがあつて幕となつた。

（恰度其折、廿七八年役の最中であつた、其夜旅順陥落の報が至つた。伊藤式部官（今の公爵）が舞臺の幕外へ現れて其電報を読み上げた。すかさずオーケストラが君が代を奏し出だす。内外人聴衆は一時に起つてこれに和した。嗚呼何といふ忘れがたい光景であつたらう）。

【入力者注】 底本と行を合わせるために、フォントサイズを小さくしたり、半角スペースを挿入した箇所があります。

底本…東京音樂學校學友會「音樂」第二卷第十一号

明治四十四(1911)年十一月十日発行

入力…小林 徹

公開…令和四(2022)年十一月六日

橘糸重 [【散文作品集】](#) に戻る。